



電腦歌姫ヨス娘と

ヨスプレックス!



SNSで知り合ったレイヤーの  
ミキちゃんと撮影を終え備え  
付けのカラオケで歌いだした  
彼女と二人で盛り上がった

「イェーイ！特別ライブ  
楽しんでくれたかな〜☆」

撮影も満足だったようで  
かなりノリノリだ





飛び跳ねている彼女の胸が  
揺れているの見ていると  
目が合った...

「なんですか？なんかエッチな  
視線を感じるんですけどオッス！！」

彼女はまんざらでも  
無い様で「」言った

「良いですよ」

「え？」

「一回衣装着てヤツて  
みたかったんです」

「今日とっても楽しかったから  
そのお・れ・い♡」







「ほらおちんちんこんなにして期待してたんじゃないんですか？」

「マスターのマイクの処理はミ〇にお任せ！」



「うわっちょっと…!?!」

「では早速」





うんうん

ぽくぽく

ちゅっ



「上目遣いすごく可愛いよ  
休憩終わったならそのアングルも  
撮ってみよう」

ちゅっ

「……ふやい。」





「じゅるっ、ぢゅるる  
んあ、んはっ」



ビデオとかで見た事あったけど  
実際自分がやってもらこう立場  
になると興奮するなあ



「ぢゅるっ……ぐっぐっぢゅるっ…  
気持ちいいでひゅか?」

「ああ気持ちいいよ  
すぐ射精ちやいそっだ」

いゅっ  
ぢゅるっ  
いゅっ  
ぢゅるっ  
いゅっ  
ぢゅるっ  
いゅっ  
ぢゅるっ  
いゅっ  
ぢゅるっ



そう言うくと彼女の勢いが増した



「あつやバイほんとに  
射精る」





「んんッ!? んんッ!」

「んッ…ああ、射精る」



「えへへっ、濃いのがたっぷり  
出ましたねマスター♡」

「すっごく気持ちいよ  
ミキちゃん」

「もうマスター!!  
今は皆の歌姫ミミ  
なんですから!!」

「ん」

ドロッ







「まだまだ元気みたいだし」

「名前を間違えちゃう  
マスターにはお仕置が必要  
ですね！」

ドコ...

ヒア  
ヒア

ビッ  
ビッ



「了解☆」

♡♡♡

「ああ頼むよ!!!」

「マスターもまだまだ満足してないでしょう」





「裏側弱い人とか多いですけど  
マスターはどうですか？」

「うっあ、そ「やばい」

「んあぶ  
ふふッ  
良かった」







「じゅるっ…んあ  
カハッ、ん」

「んっ…」

ムシシ…

コホッ  
ハ

「んっ…」  
「んっ…」













「ミ〇ちゃん…すごい  
上手だよ」

「流石歌手ハンドマイクの  
扱いも巧いんだね」

ゼツ  
ゼツ  
ゼツ

ほっ  
ほっ  
ほっ

ニク

ケッ  
ケッ

「けほッ…  
ありがとう、マスター」







「恥ずかしいんですけどもさあー」

「プリプリのくせに笑  
それはミ〇なのミキちゃんなの？」

「フッフッフっ♡教えてあげる」







「ごちゃごちゃ... 早く挿... っっっ」

「ごちゃごちゃ... っっっ」

ごちゃごちゃ...

ごちゃごちゃ

ごちゃごちゃ

んっ

っっ







「歌姫まん」、締め付け良くて  
気持ち良いよ」

「くっ…はんツッ！」

「あっ、ミ〇〇の膣内を  
ズンズンしてくるツッ」

「マスターのおちんちんが  
リズムよくツッ…！」

ぬぽ  
スル  
スル







「俺もそろそろ  
やばいッ」

「気持ち良くなってるよ、さっさとさっさと、  
私、ああ……」

「どっつしたの、リズム取って  
くれるんじやなかったの……？」

ぬぽ  
ヌ  
ヌ







♡♡

ハッハッ

ハッハッ

うん...

ハッハッ

「んん」

「ちゅーん」

「まだちゅーんですか!」

「んん」









「もっバテちゃったの？」

「バテてなんかないしッ」

「じゃあまだまだ大丈夫かな！」

「え、嘘!？」

んんん

ん

んんん

んんん

んんん





「タフすぎるよ  
休憩挟も？」

「俺まだ満足  
してないから  
もう少し頑張つてッ」

「イヤッ、  
さっきより  
良い感じに  
当たつてっ…」

んっ  
んっ



「じゃあ「う」した方が  
良い所に当たる感じ？」

「当たるっ…」

「一番良い所に  
当たっちやってる」♡





「この体位にしてから  
締めりが良くなった  
んだけど…ッ」

「ちゅん♡ちゅん」

「好きでッ、  
私後ろから  
突かれるのがあ  
あ♡」

ちゅん

ちゅん

ちゅん  
ちゅん  
ちゅん

ちゅん  
ちゅん









「わたっ、私てるてるダメかもオ!!」

「まだっ、まだっこれからでしよっ」

わんわん

わん

わんわん

わんわん

わんわん

わんわん

わんわん

わんわん

わんわん













「これで最後だから  
二人で気持ち良く逝」っ

「あぁ〜♡」

ズキ

ズキ

ズキ

ズキ

ひんがっ…ほじあ

んん

ズキ

ズキ







「こんなにならなくてよかった  
ことないからっ♡」

「俺もだよっ」

「おかしくなっちゃったっ」

「腰も勝手に  
動いちゃってる…っ」

アハハハ

ズッ

ズッ

あー

はあ

あー

いっ

ズッ

ズッ





「私も、おんこさん  
だから...」

「はあ...はあッ  
そろそろイクよ...」

「おんこさん...」

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん



んんん

んんん

んんん

んんん

「熱いのが  
ビュルって挿って  
来てる♡」

「んんん  
膣内で感じるっ」

「くっ…っは  
射精るッ!!」





「…ぞうかも」

「…俺もびつくりだよ  
身体の相性バツチリなのかも」

「あはアッしゅ、凄い  
まだこんなに射精する  
なんてえい」

「じゃあ、また今度  
お願いしようかな」



「じゃあまた  
次のイベントの時にでも…」

彼女はそういって  
気絶するように眠ってしまった

END...